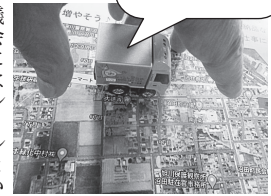


# 「議会村」を住民に解放するための 今スグ〇円でできる一般質問スクリーン活用

はインセ  
ボイミ  
・パワー  
・違い  
を走ら  
ま  
カると  
映る。



議会に妖怪が出る。「議会村」という妖怪だ。「妖怪」を今風に言えば「感染症」か。つまり、「議会村」コロナだ。「どここの議会も同じだ」と思考停止をすることで感染は拡大し、重症化する。

議会村とは原子力村のように、特定の関係者によって構成される特殊な集団だ。議員は選挙によるストレスの対価などにより、地位などが与えられる。同時に意見や質問をする権利も与えられるが、そこにはルールという名の制限が付きまとう。結果的に国会から町議会まで、多くの議会は民主主義という相互監視システムによって内向きのルールが構築され維持されやすい性格を内包している。それが、議会村だ。

この状態で、二元代表制の片方である首長からの情報のみで議会が結論を出す場合には、首長の意見に誘導されやすくなる。そのことを住民は「まさか？」と思うかもしれないが、議員であれば誰もが経験していることだ。

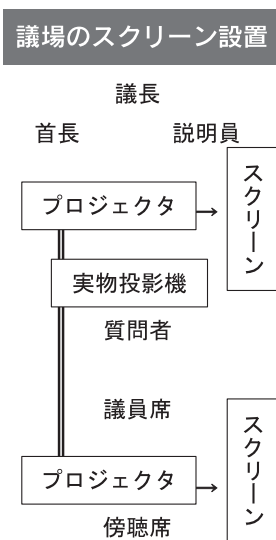
この手法はスピード感を持つかもしれないが、「議会無用論」に直結する。事案によっては、首長が住民を「あきらめさせる」ための装置として議会を利用するケースもある。こうなれば明らかに得をするのは首長であり、不利益をこうむるのは住民である。その間の議会は、ピエロか？

私は何もルールや民主主義が悪いと言っているのではない。一見、正義であるかのように見えるシステムを、たとえ無意識であっても、議論を深めないように悪利用

する傾向が悪いと言っているのだ。議会にはルールという名の自主規制よりも、より洗練され、成熟した法の精神こそが重要だ。

少しでも意識が高い議員であれば、ほかの議会の一般質問などを傍聴されたことがあるだろう。その時に誰もが実感するのは、「議会によって、あらゆる手法がこれほど大きく違うのか」という驚きだ。つまり、ルールに答えは無いのだ。ただ必要なのは、より住民によりそったルールへ、常にアップデートし続ける行動だ。

この具体的な行動のみが動脈硬化した議会村を回復させるワクチンだ。この効果的なワクチンのことを「議会改革」と呼ぶ。ワクチン開発の最前線が、『北海道大学公共政策大学院（HOPS） 地方議員向けサマースクール』であり、『早稲田大学マニフェスト研究所』だ。どちらにも共通する手法の特徴は、ほかの議会を疑似的に体験してもらう仕掛けだ。つまり、まずは議会村から議



員を村の外に出すのだ。

私が所属している北海道の沼田町議会は今、絶賛「議会改革」実践中♪だ。おそらくスピードは世界一だろう。今年の議会改革ギネスブックのスピード賞に立候補したいぐらいだ。乾いた砂漠が水を呑みこむように、次から次へ行動を具体化している。全議員で構成する議会改革特別委員会を二〇一九年六月に設置してからわずか一五カ月で、議会報告会、サポーター二名、モニター一〇名、全議員へのタブレットの予算化、議場の中継などが矢張り早く実行された。これらには、本件の指導で世界的なトップである西科純さん（元北海道芽室町議会議事務局長）と土山希美枝・龍谷大学教授が複数年のサポーター外は元々、超個人的な各議員のポテンシャルが議会改革の理念で歯車がかみ合い、意識と行動が外に向かって解放したことが原因であり、かつ最大の成果だ。

そんな我々が特別だったわけではない。きっかけの一つは、新人議員の長野時敏さんが「一般質問でスクリーンを使いたい」と言い出したことだ。長野さんは教師だったので、授業で説明にスクリーンを使うのは当然だった。何よりもスクリーン関連すべての機材が地元の学校にあることを知っていた。このアイデアを、これまた新人議員の畑地誉さんがコンピューターエンジニアであった経験を生かして、より効果的に本会議場に設置した。つまり日本中の議会にすでにあるインフラを活用して、すぐに予算〇円で事業化できるのだ。おそらく、行政の職員にも予算と決算の考え方などで良い刺激になったと思う。

全国のすべての議会に提案する。行政が持っているスクリーン関連の機材を、次回の定例会の一般質問からは非、使って欲しい。「議会村」感染症のワクチンとは、議会を超えてゆく「議会改革」クラスターなのだから。

へくぼ もとひろ・沼田町議会議員